東　奈　良

1978・11

東奈良遺跡調査会

はしがき

東奈良遺跡の発見は、昭和46年、遺跡内を南北に流れる、小川水路の改修工事によって、大量の土器や石器が出土したことに始まりました。

その後、万国博覧会の開催に合せて、阪急電鉄京都線に南茨木駅が新設されそれまで静かな水田地帯であった一帯は、急速に宅地化が進み、現在では大ベッドタウンの様相さえ示すまでになりました。

これらの開発に先立って、茨木市教育委員会では大阪府教育委員会とともに、東奈良遺跡調査会を組織し、各種の開発に先立つ発掘調査を実施してきた。

今回市制施行30周年を記念して茨木市史の復刻版が発刊されることになり、これを機会により多くの方々に東奈良遺跡を知っていただくため、現在までの調査の結果を写真によって説明してみました。

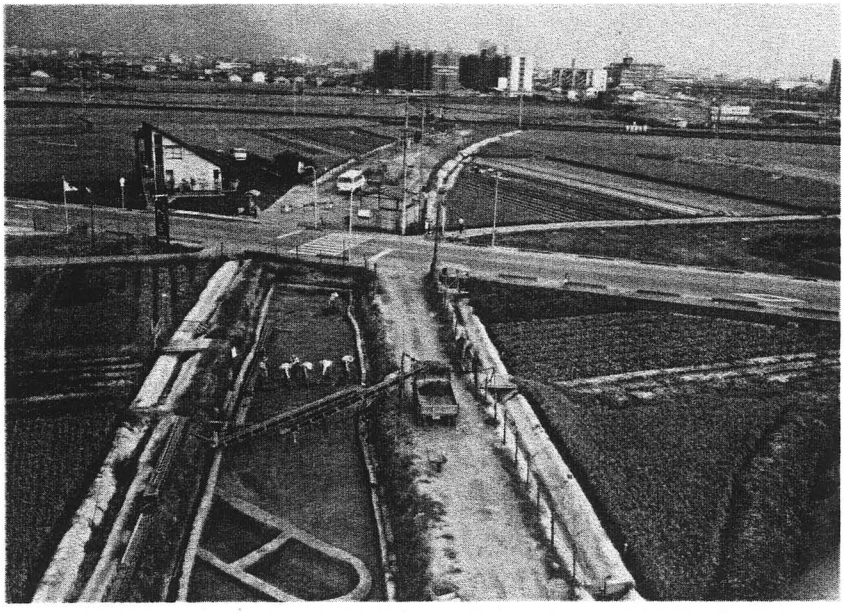
今後より多くの方々に利用していただくとともに遺跡の保存について一層のご援助とご指導を願えれば幸いと存じます。

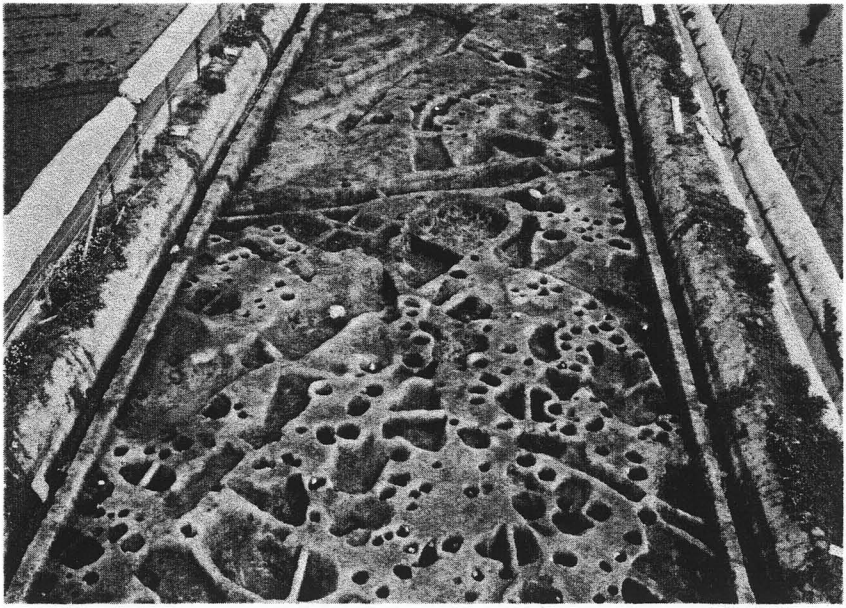
昭和53年11月3日

東奈良遺跡調査会理事長

小　野　耕五郎

東奈良遺跡全景（西から）





柱穴や溝の遺構

現在までの調査の結果、東奈良遺跡では、すでに縄文時代の前期に人々がその足跡を残している。小さな土器片しか出土していないが、その後も引き続き人々が住んでいたことは、縄文時代中期の石棒が出土していることからも明らかである。

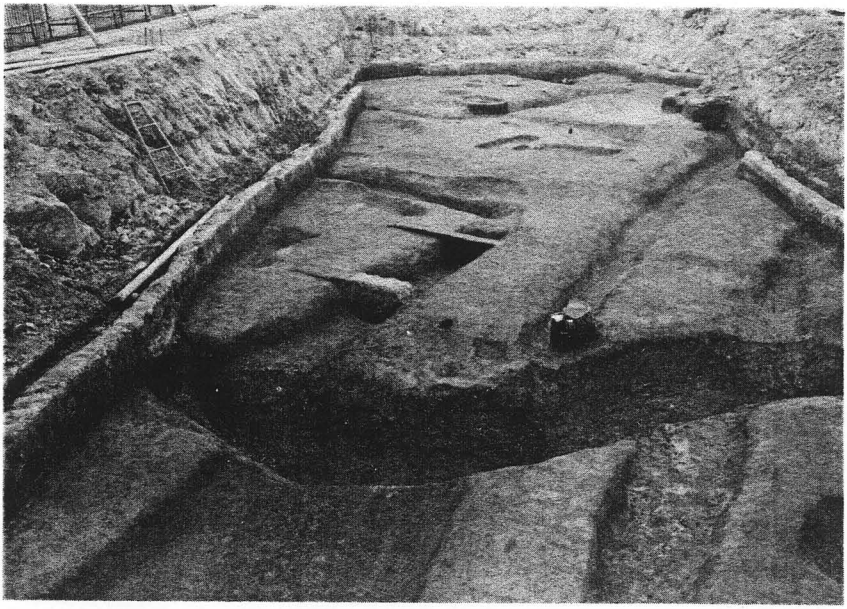
大規模な村としての形態を整えるのは、弥生時代になってからである。

住居の跡とみられる多くの柱穴や溝などが発見されており、すでに弥生時代の前期にはこの地域に米つくりを生活の基盤とする村ができていたことが明らかとなっている。

貯蔵穴から出土した鍬・鋤

当時の水田は、堅いカシの木で作った鍬や鋤で耕された。

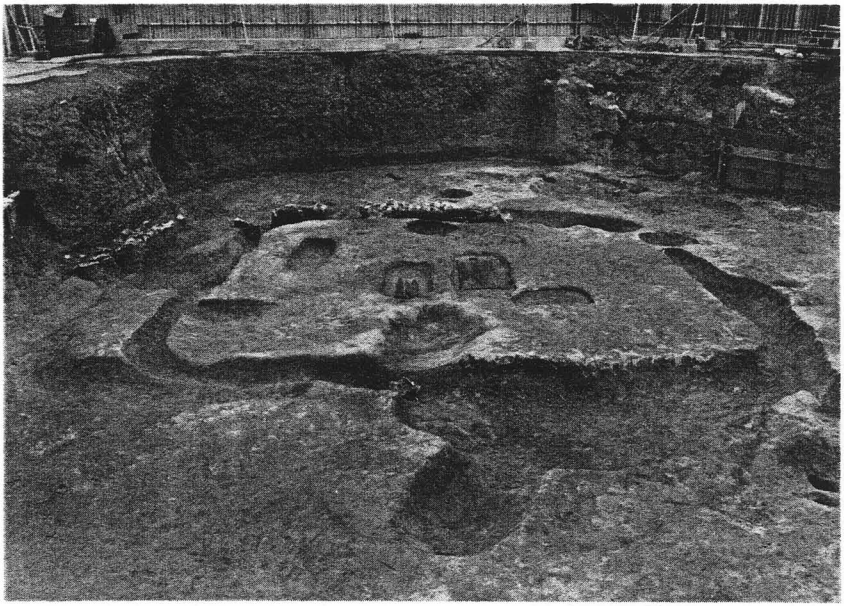
住居の周囲には、乾いてヒビ割れしないように、鍬などの未製品を水づけにしておく貯蔵穴が掘られている。



弥生時代前期の方形周溝墓

弥生時代には、周囲に溝をめぐらせた「方形周溝墓」がつくられ、大人は木棺、幼児は甕や壺が棺として使用された。

東奈良遺跡では、弥生時代前期にすでに「方形周溝墓」がつくられていたことが、調査によって明らかになっている。

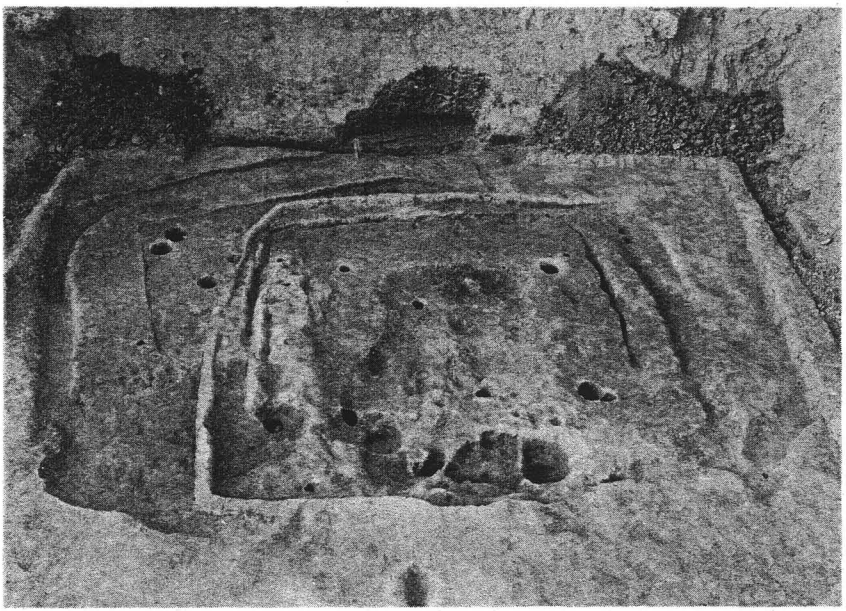


弥生時代中期の方形周溝墓

弥生時代中期になっても、引き続き「方形周溝墓」がつくられた。

周囲の溝からは、死者を埋葬する時に祭りに使った土器が多く発見されている。

埋葬は7回されており、中央では木棺が2基並んで発見された。

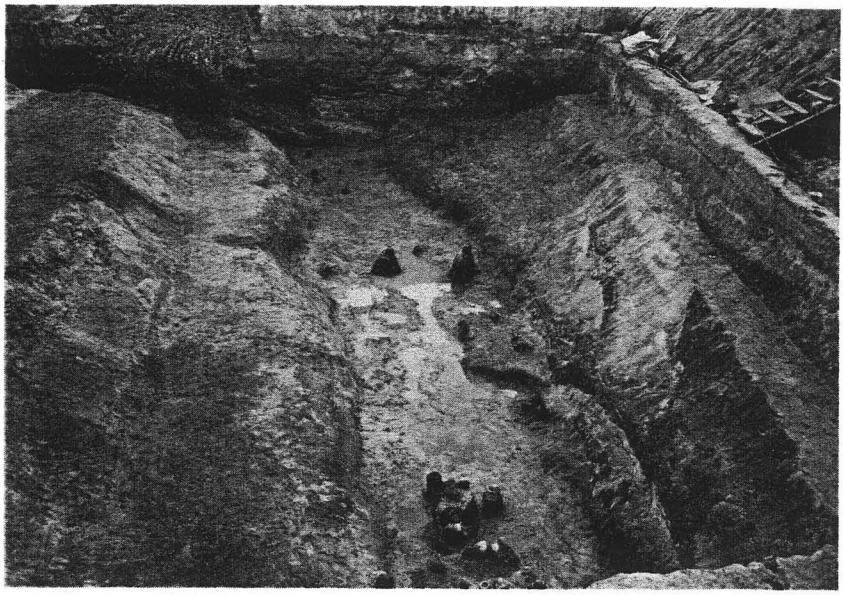


古墳時代前期の竪穴住居址

古墳時代にも多くの人々が生活をしていたことが、住居跡などが発見されていることから明らかである。

弥生時代の住居は円形の竪穴住居の例が多いが、古墳時代になると方形のものに変わる。

この住居跡は古墳時代前期のもので、奥と左右にベッド状の高まりを作っている。屋根は4本の柱で支えている。2回以上建てかえをしていることが明らかである。



古墳時代前期の大溝

東奈良では、古墳時代前期に、幅10m、深さ3m以上の大規模な溝が、あちこちに掘られていた。調査によって一直線に連らなるものや、枝分かれするものがあることが明らかとなっている。

なぜこのような大溝が必要であったのか、よくわかっていないが、丸木舟が発見された溝もあり、運河として使用されたことは十分考えられる。

これらの溝は、すべて厚い砂で埋まっており、短時間の内に埋まってしまったと考えられる。

東奈良遺跡では、古墳時代前期以後の遺物や住居跡などがほとんどみられないことも、あるいは、洪水かなにかで一ぺんに大溝が埋まってしまったことと関係があるのかもしれない。

古墳時代前期の土器群

大溝以外にも多くの溝が発見されている。

溝の中には、多量の土器が埋まっており、この東奈良遺跡から出土した古墳時代前期の土器には、壺や甕や高杯などのセット関係や移り変わりを見る上で重要な資料となるものが多い。

古墳時代前期の土拡墓群

東奈良遺跡では、北西から南東に向って掘られた大溝の西側で、3列で市松状に掘られた古墳時代前期の土拡墓群が発見されている。

中には土器が多く入っており、これらの土器からみれば、ほとんど同時に作られたとも考えられる。

この墓は100基以上あると推定されているが、これほどの墓を一時に作らなければならないほど人々が死んだのか、そうとすれば原因は何か。大きな「なぞ」がひめられていそうである。

銅鐸鋳型完形品

東奈良遺跡が全国的にも注目されるものとなったのは、銅鐸の鋳型をはじめ、銅戈、ガラス製勾玉の鋳型など、鋳造に関係する遺物が大量に出土したからでもある。

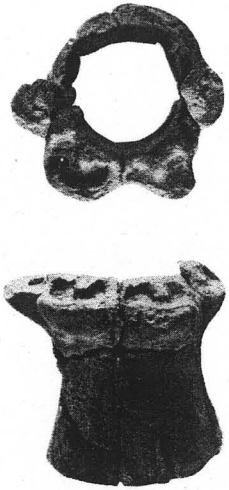
これは単に多くのなぞを持つ遺物である銅鐸の鋳型が発見され、銅鐸の製作が石製の鋳型によっておこなわれたことが確認されたことだけにとどまらず、流水文を描いた鋳型10種のうちには、すでに同じ鋳型から製作されていることが明らかとなっていた、豊中市桜塚出土鐸と香川県善通寺市我拝師山出土鐸を製作した鋳型のあること。また、豊岡市気比出土第3号鐸を製作した鋳型のあることが明らかになったことに、重要な意義をもつものと言える。

東奈良で製作された銅鐸が、はるか日本海岸、あるいは海を渡って四国へ旅をしている背景をはやく知りたいものである。

桜塚・我拝師山の銅鐸を製作した鋳型

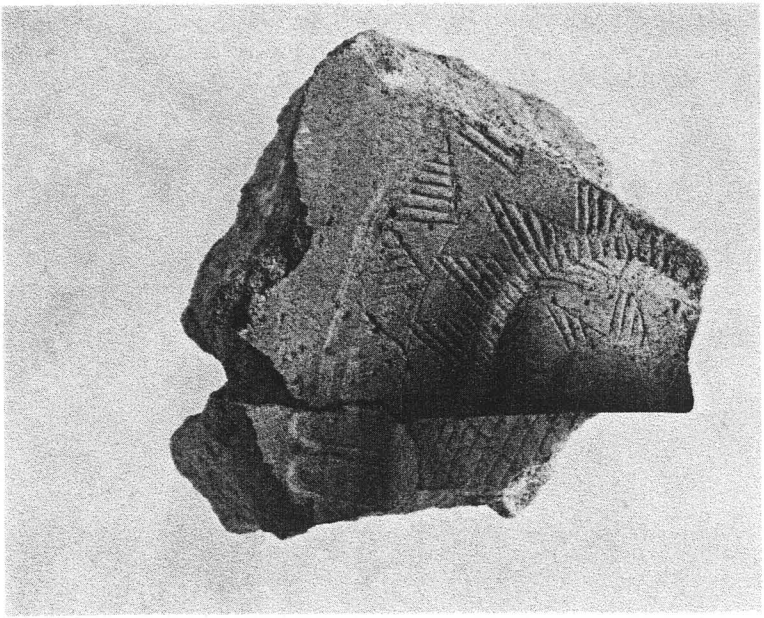
豊中市桜塚及び香川県善通寺市我拝師山から出土した兄弟の銅鐸を製作した鋳型。

豊岡市気比出土第3号鐸を製作した鋳型
（凝灰質砂岩製）



ガラス製勾玉の鋳型（土製）

銅戈の鋳型（土製）



鋸歯文で飾られた銅鐸の鋳型

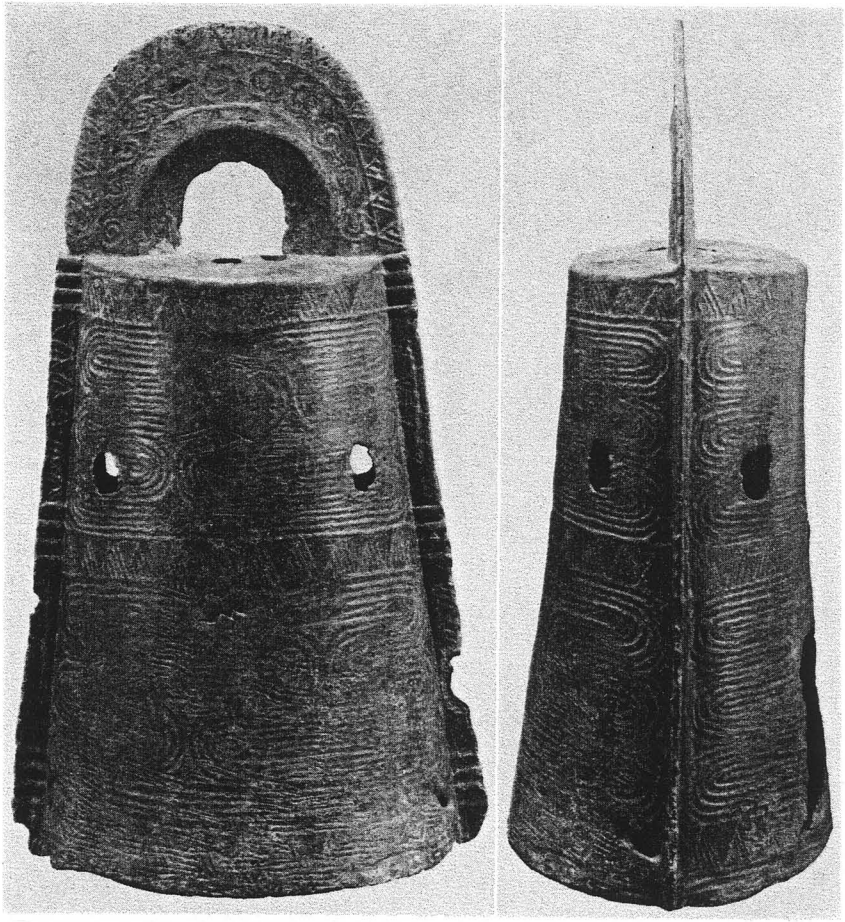
東奈良出土の銅鐸鋳型は、流水文を描いたものが10種、袈裟襷文を描いたものが2種ある。

ほとんどが外縁付鈕式に属する、銅鐸としては古い段階のものであるが、この写真の鋳型は、中段階に属する扁平鈕式のものである。材質は他の鋳型と同じ神戸層群中に産出する凝灰質砂岩である。

古い段階の銅鐸には、同じ鋳型で製作したことが明らかなものがかなりあって、これらは、東奈良で製作されたように石製の鋳型が使用された可能性が強い。

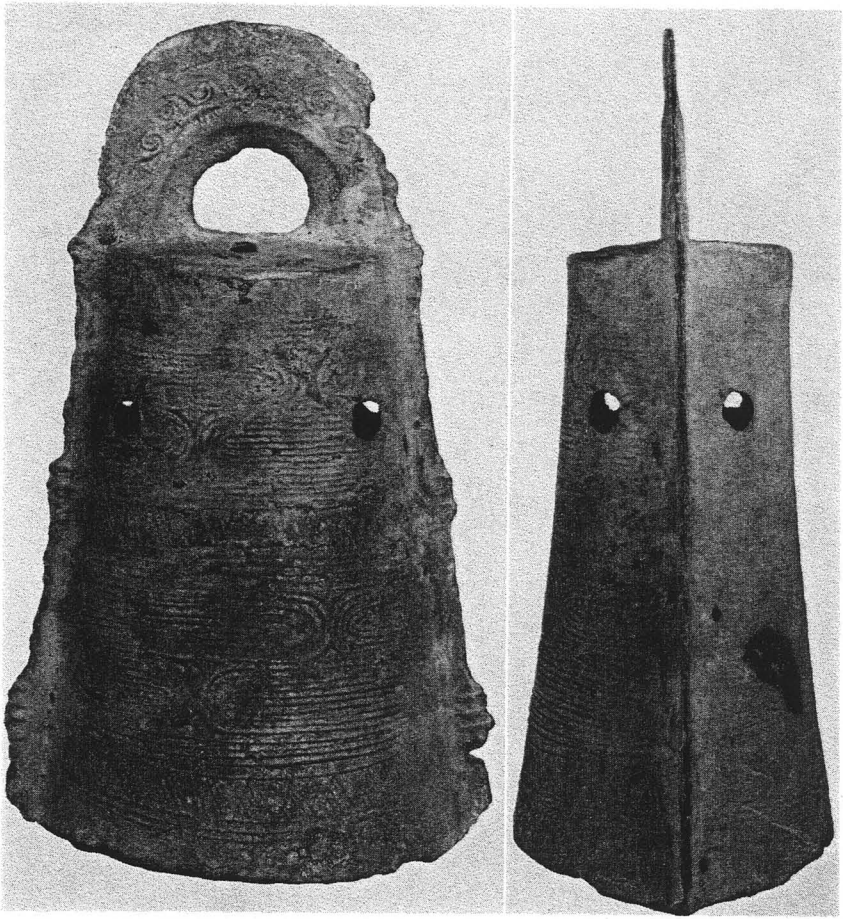
新段階の銅鐸には、現在まで同じ鋳型で製作されたことが明らかなものはない。このことから、製作には石型でなく土型が使用されたと考えられている。

古段階と新段階の間にある扁平鈕式の銅鐸にも、同じ鋳型から製作したものがあるが、古段階に比べて例は少ない。鋳型が石から土に変って行く段階にあると考えられており、このことを知る上でも、重要な遺物である。

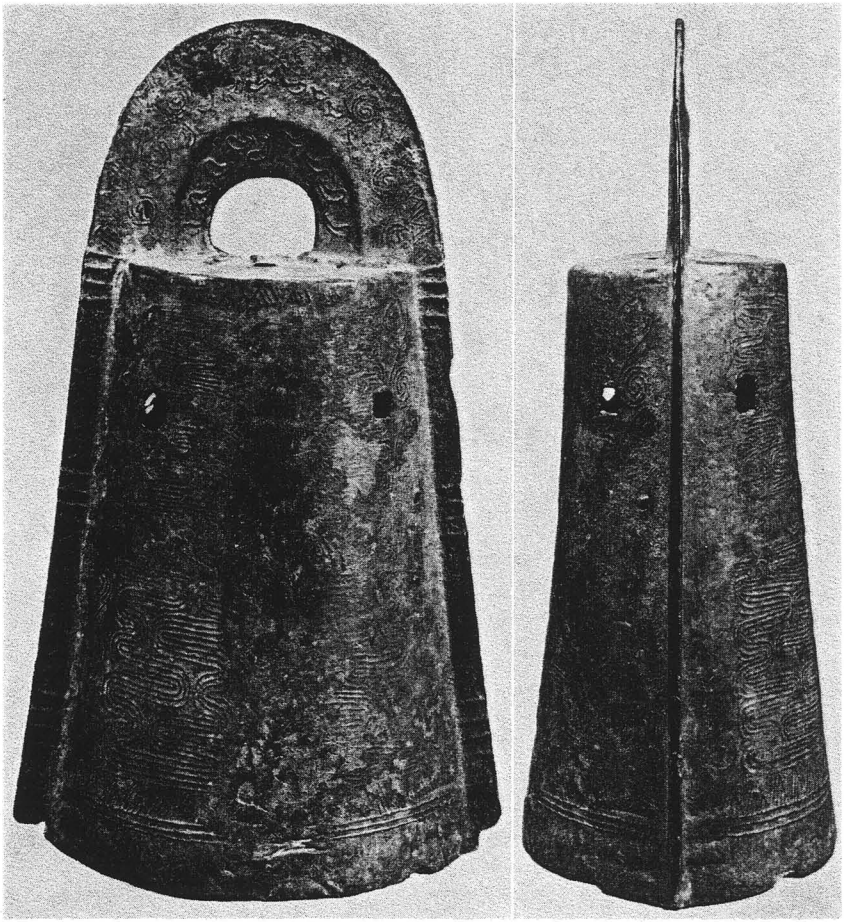


香川県善通寺市我拝師山出土の銅鐸

東奈良出土の鋳型から製作されたもので、豊中市桜塚出土の銅鐸より先に製作されたことが、文様の破損の度合の比較から明らかとなっている。



豊中市桜塚出土の銅鐸

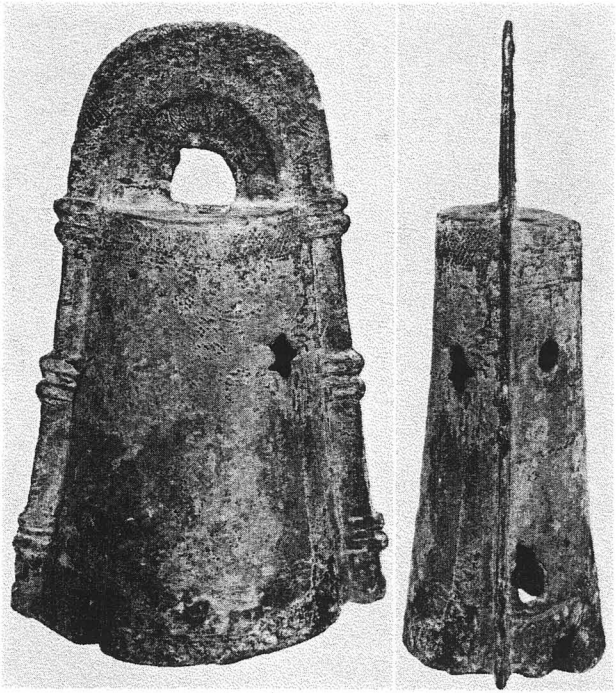


豊岡市気比出土第3号銅鐸

身の中央と両側に縦に連続渦巻文を配し、中央部に横にも連続渦巻文を配して、この渦巻文で四分される内に流水文を配している。

東奈良出土の完形の鋳型に共通するモチーフがみられる。

中央部右側の連続渦巻文の上下に銹のため鮮明ではないがトンボと魚の絵のあることが確認され、東奈良出土の鋳型から製作されたことが明らかとなった。



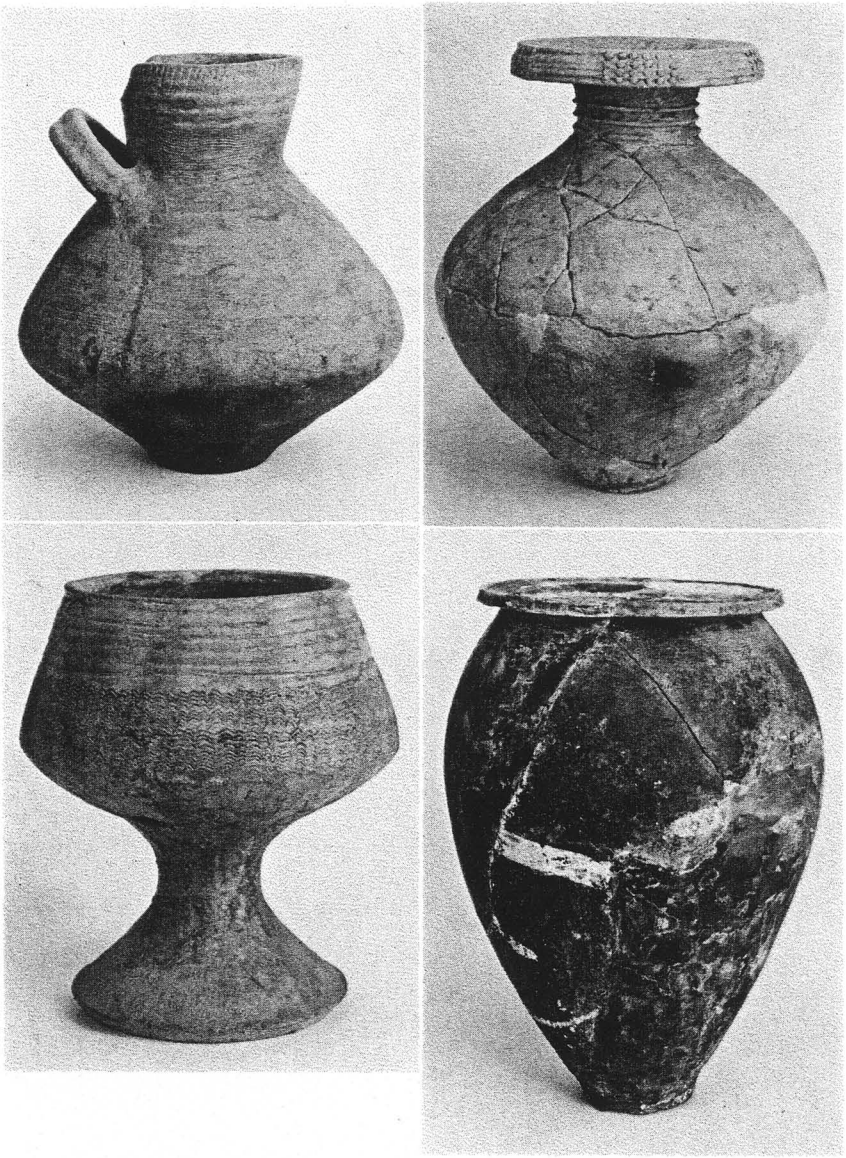
吹田市山田出土の銅鐸

東奈良遺跡の西方の千里丘陵から出土したもので、この銅鐸のあることから、東側の平地に弥生時代の集落の存在が予想されていたものである。

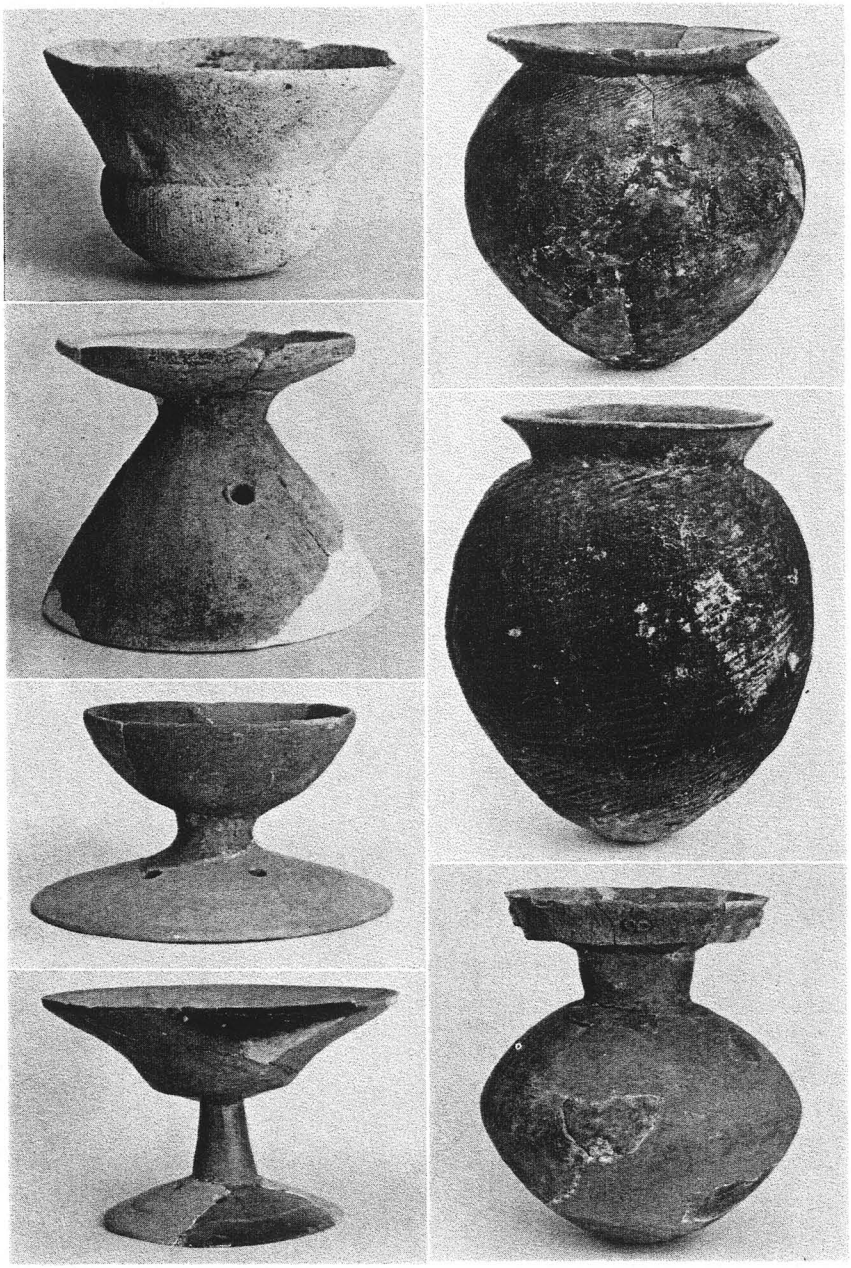
袈裟襷文銅鐸で古段階に属するものである。

鈕はすべて鋸歯文で飾られ、時期が異なるが、東奈良出土の扁平鈕式銅鐸の鋳型に共通するものがみられる。

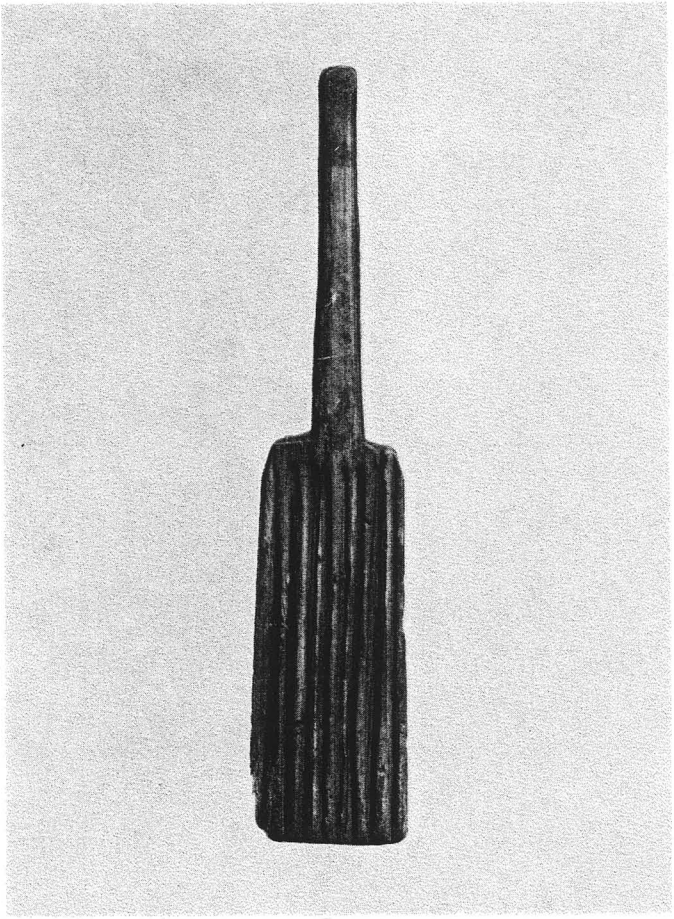
東奈良で製作された可能性の強いもので、製作された後、他の村へ配られたのでなく、自らの村で祭に使用され埋められたのであろう。



東奈良遺跡出土の弥生時代中期の土器



東奈良遺跡出土の古墳時代前期の土器

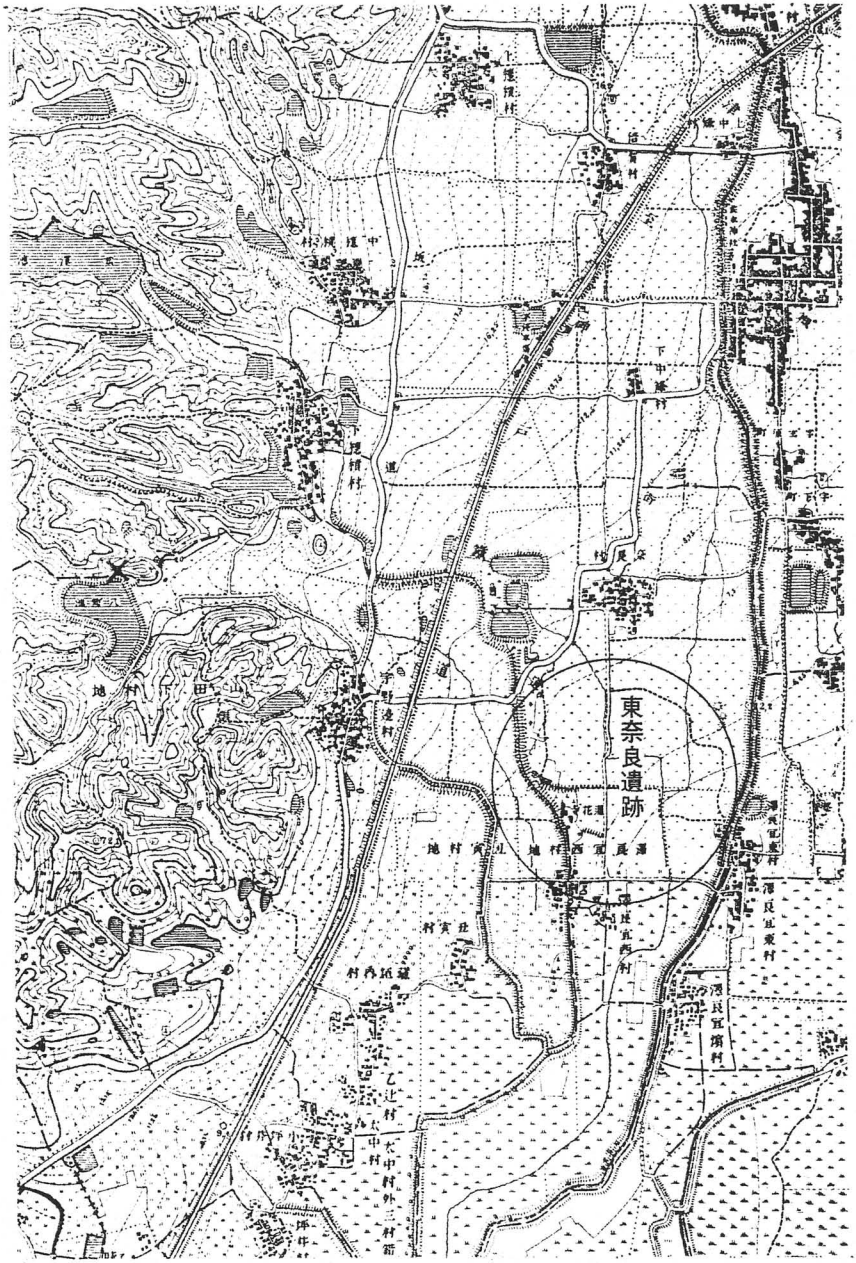


叩　き　板

畿内の弥生時代後期の土器は、粘土を叩き上げて製作していて、特に甕には叩き板で叩いた痕がよく残っている。

この叩板は羽子板状に加工した板に8本の溝を彫っている。材質は杉と推定されている。

この叩板が出土するまでは、多分この様な板であろうと想像されていたにすぎず、当時の土器製作を知る上で重要なものである。



東奈良遺跡位置図　　×山田銅鐸出土地